



東北復興日記

まだまだ

▶▶▶ 242



薬師堂手づくり市
実行委員会

西大立目祥子さん

地域はさまざまです。食品五十、雑貨百のブースが並び、出店者の多くは宮城県内ですが、青森県や福島県などの出店者も。食品の二割は山形県の方々が販売しています。

仙台市若林区の陸奥国分寺薬師堂境内で毎月八日に「お薬師さんの手づくり市」＝写真＝を開催して、今秋で九十年になります。手づくりの品々を目当てに多くの人が集まる風景は、なじみ深いものになってきました。

手づくり市は、景気が冷え込んだ時期に「東北の各地の技や商品を仙台で売ることで地域を応援で

米づくりにかける若夫婦、家業の炭焼きの炭をお菓子に転用する女性、アイデア豊かな木工品を生む男性…。準備した品々を手に楽しそつに集まる彼らの姿に、暮らしを技で実らせる生き方の脈動を感じます。

そうした中、友人の東北工業大 学教授、大沼正寛さんから、小さな生業の場を結び新たな創造を目

毎月8日楽しむ定期市

きないか」と計画を練り始め、陸奥国分寺、地元の町内会、仙台市文化財課の協力を得て始めました。目指したのは、売り手が定期収入を得るだけでなく、買い手も毎月八日には必ず買い物を楽しめる、当てになる定期市。これまで休んだのは台風直撃の二回のみ。東日本大震災の翌月も開きました。

商品は手づくり品限定で内容や

指す「コアトリエ」プロジェクトの協力依頼がありました。手づくり市がコアトリエの連携を生むスティージになるのではないかと、というのです。早速、出店者調査が行われただけでなく、伝統の市から新しいマルシェまで東北各地の事例が集められています。

先頃、手づくり市で、山形の脱サラ農家と仙台の和菓子店の若旦那が「黒米おはぎ」を開発、販売を始めました。世代も地域も異なる彼らの協働は、市があつてこそ生まれました。共感を持って集まる場にコミュニティが生まれ、つながりが創作を支え、技と技の連携を育んでいくのではないのでしょうか。



※この連載は、東京のNP
O法人JKSKと、被災地の
女性たちが協力して復興に取
り組む「結結プロジェクト」の
協力を得て、掲載しています。